

2022年度 入学試験問題

国 語

(60分)

〔注意〕

-
- ① 問題は㉮～㉯まであります。
 - ② 解答用紙はこの問題用紙の間にはさんであります。
 - ③ 解答用紙には受験番号、氏名を必ず記入のこと。
 - ④ 各問題とも解答は解答用紙の所定のところへ記入のこと。
 - ⑤ 各問題とも特に指定のない限り、句読点、記号なども一字に数えること。
-

西大和学園中学校

問題は次のページから始まります。

次の文章を読んであとの問いに答えなさい。

さて、バイオミメテイクスにならつて長寿のコツを他の生物から学ぶことはできないでしょうか？ 寿命に関しては、ヒトより長く生きられる生き物はあまりいないため、難しいように思いますが、注目に値する動物が1種います。第3章で紹介したハダカデバネズミです。

同じサイズのげっ歯類（ネズミの仲間）、例えばハツカネズミの寿命が2〜3年なのに対して、ハダカデバネズミは30年と10倍ほど長く生きます。すごい多様性の幅ですね。霊長類にたとえると、ヒトとほぼ同サイズのゴリラやチンパンジーの寿命は40〜50年なので、もしハダカデバネズミ並みにヒトが長生きできたとなると、単純計算ではヒトの寿命はその10倍の500年生きることとなります。ハダカデバネズミの長生きの理由を真似して、ヒトの寿命を延ばすことはできるのでしょうか？

ハダカデバネズミの特徴については、第3章でお話ししました。ここではそれをおさらいしながら、^①ハダカデバネズミのどのような特徴が長寿に結びついたのか、考察してみましよう。

(A)、「進化が生き物を作った」という観点から、どのような選択の結果、長寿になったのか想像していきます。ハツカネズミもハダカデバネズミも、祖先は同じ小型のネズミでした。小型の祖先ネズミは陸上と地下の両方で暮らしていました。地下は巣穴だったのかもしれませんが。偶然的「変化」が起こり、地下で長く生活できるものが出てきました。ヘビなどの天敵から身を守るための「選択」も働いたのかもしれませんが。あるいは、環境の変化で地下のほうがカイトキになったのかもしれませんが。地下の穴の中でも、また変化と選択が起こり、低酸素でも活動できるもの、栄養が少なくても生きられるもの、そして狭い穴の中でも仲良く協力して暮らせるものが、選択されてきました。このときに、ネズミの繁殖力の強さ、世代交代の短さが進化速度を加速したと思われる。

そして協力はやがて組織化し、食料調達、子育て、巣穴の設計・防衛にまでおよび、組織力が強い集団が選択されていきます。最終的には、女王のみが出産し、あとは分業・協力して集団を維持する真社会性ができ上がったのです。さらに、低酸素環境での代謝の低下、分業によるストレスの軽減が、長寿化にプラスに働いたとスイサツされます。

長寿の要因は、それだけではありません。天敵が少なく、食べ物に限られている穴の中での生活では、「食べられて死ぬ」という一般的なハツカネズミなどの多産多死のスタイルよりも、少なく産んで長生きさせる「少産長寿」のほうが、集団および個体を維持するコストがずっと低くてすみます。長生きは、集団での若年個体の割合を下げ、子育てにかかる労力の割合も低下します。

そして野生の生き物は概してそうなのですが、老年個体のパフォーマンス（体力）も死亡率も、若年個体とほとんど変わりません。

つまり死ぬ直前まで働き、ピンピンコロリで死んでいきます。そのため人間社会とは異なり、老年個体を支える集団のコストもないのです。非常にエネルギー効率の良い「総活躍」社会を形成しています。

(B)、それでは ^② ハダカデバネズミのどこを真似したらヒトも同じように超長寿になれるのでしょうか？ まず低酸素、低体温、低代謝などの生理的な部分は、簡単に真似するのは無理です。これは基礎研究でじっくりメカニズムを解明し、これらの生理現象と似た効果を作り出す薬やサプリメントを開発するしか方法はないでしょう。例えば活性酸素の発生を抑えるような薬です。

(C)、^③ 社会的な変革のほうは可能かもしれません。この点について、ハダカデバネズミから学べることは2つあります。一つは子育て、もう一つは働き方です。

まず子育て改革ですが、ハダカデバネズミの女王のように産むことに特化したヒトを作るとまではいかないにしても、産むことを選んだカップルに社会全体としてのサポートを厚くします。例えば3人以上子供を作ると養育費は国が負担する。4人目以降は養育費プラス「手当」をシキユウするようにして、産みたい方はたくさん産めるような仕組み作りはどうでしょうか。もちろん保育園の増設、保育士の増員もして子育ての直接的な負担も分担します。子育ての実務を今以上にプロに任せることにより、親個人にかかるコストや労力、ストレスを軽減します。この政策は少子化にも歯止めをかけられるかもしれません。

2つ目の働き方改革ですが、ハダカデバネズミの「生涯現役」にならないです。現在の退職後の年金を若い世代が負担する日本の仕組みは、いつも世代間の人口バランスが取れているわけではないので、安定した運用は困難です。(D) 現在の日本のように少子高齢化の状態では、若い人の負担が増えています。

そこで世代間の負担バランスを取るためには、歳をとってもできる仕事、やりたい仕事を一生続けられる仕組みを作るのはいかがでしょうか。一部の企業ではすでに始まっていますが、定年制など、労働者人口が増え続けていた時代に作られた制度は見直し、働ける人、働きたい人は年齢にかかわらず働けるようにするのはいかがでしょうか。うまくいけば、生きがいを作り、健康にもプラスに働き、長生きが楽しくなる社会が築けるかもしれません。

(E) シニアが活躍する制度を提案すると必ずある議論は、若い人の職が減ってしまわないかということです。今の日本のように若い世代の人口が減少している状態では、その心配はあまり大きくないのかもしれませんが。逆にこのまま定年制などを続けていくと、就労者人口が維持できずに、人手不足により日本の産業をはじめ、研究、技術開発などさまざまな分野の維持が困難になる可能性もあると思います。

以上は私が考える理想論なので、現実にはうまくいかないことも多々出てくるかもしれませんが。ただ、ハダカデバネズミの多くの個

体は昼寝をしています。みんなが競って仕事量を増やし成果を競う社会から、効率を上げてゆとりある社会に転換することが、社会全体のストレスを減らし、結果的にヒトの健康寿命を延ばすことができるかも、と私は思いますが、皆さんはどう思われますか？

これまでお話ししてきたことで、生物共通の「死」の意味が見えてきたでしょうか。生き物にとって死とは、進化、つまり X を実現するためにあります。「死ぬ」ことで生物は誕生し、進化し、生き残ってくることもできたのです。

化学反応で何かの物質ができたとします。そこで反応が止まったら、単なる塊です。それが壊れてまた同じようなものを作り、さらに同じことを何度も繰り返すことで多様さが生まれていきます。やがて自ら「フクセイ」が可能な塊ができるようになり、その中でより効率良くフクセイできるものが主流となり、その延長線上に「生物」がいるのです。生き物が生まれるのは偶然ですが、死ぬのは必然なのです。壊れないと次ができません。これはまさに、本書で繰り返してきた「ターンオーバー」そのものです。

——つまり、死は生命の連続性を維持する「ゲンドウ力」なのです。本書で考えてきた「生物はなぜ死ぬのか」という問いの答えは、ここにあります。

「死」は絶対的な悪の存在ではなく、全生物にとって必要なものです。第1章から見てきた通り、生物はミラクルが重なってこの地球に誕生し、多様化し、絶滅を繰り返して選択され、進化を遂げてきました。その流れの中でこの世に偶然にして生まれてきた私たちは、その奇跡的な命を次の世代へと繋ぐために死ぬのです。命のたすきを次に委ねて「利他的に死ぬ」というわけです。

生きている間に子孫を残したか否かは関係ありません。生物の長い歴史を振り返れば、子を残さずに一生を終えた生物も数えきれないほど存在しています。地球全体で見れば、全ての生物は、ターンオーバーし、生と死が繰り返されて進化し続けています。生まれてきた以上、私たちは次の世代のために死ななければならぬのです。

「死」をこのように生物学的に定義し、肯定的に捉えることはできませんが、ヒトは感情の生き物です。死は悲しいし、できればその恐怖から逃れたいと思うのは当然です。たとえハダカデバネズミ的な生活を真似ることに見事成功し、健康寿命が延びて理想的な「ピンコロリの人生」が送れたとしても、やはり自分という存在を失う恐怖は、変わりありません。ではこの恐怖を、私たちはどう捉えたいのでしょうか。

答えは簡単で、この恐怖から逃れる方法はありません。この恐怖は、ヒトが「共感力」を身につけ、集団を大切にし、他者との繋がりにより生き残ってきた証なのです。

ヒトにとって「共感力」は、何よりも重要です。これは「同情する」ということだけではありません。ヒトは、喜びを分かち合うこと、自分の感覚を肯定してもらうことで幸福感を得ます。美味しい料理を二人で食べて「美味しいね」と言うだけで、さらに美味しく

感じられるのがヒトなのです。そしてこの共感力はヒトとヒトの「絆」となり、社会全体をまとめる骨格となります。ヒトにとって「死」の恐怖は、「共感」で繋がりが、常に幸福感を与えてくれたヒトとの絆を喪失する恐怖なのです。また、自身ではなく、共感で繋がったヒトが亡くなった場合も同じです。そしてその悲しみを癒やす、別の何かがその喪失感を埋めるまで、悲しみは続くのです。

(小林武彦『生物はなぜ死ぬのか』による)

【語注】

(注1) バイオミメティクス … 生体の持つ優れた機能や形状を、工学や医療の分野で応用して使うこと。

(注2) 霊長類 … サルの仲間。人間もここに分類される。

(注3) メカニズム … しくみのこと。

問一 部 a e のカタカナを、それぞれ漢字に直しなさい。(かい書で、ていねいに書くこと)

問二 (A) (E) にあてはまる語としてふさわしいものを、次の中からそれぞれ一つずつ選び、記号で答えなさい。ただし、同じ記号を二度以上用いてはいけません。

ア たとえば イ さて ウ まず エ このように オ そして カ 一方

問三 部①「ハダカデバネズミのどのような特徴が長寿に結びついたのか」とありますが、ハダカデバネズミが長寿である理由について説明したものととして、最もふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア ハダカデバネズミは、他のネズミよりもたくさんしよくりょうの食糧を必要としつつも食料の少ない環境で生活するために、若年個体が老年の個体の分も働く仕組みを作り上げたから。

イ ハダカデバネズミは、ハツカネズミなどの他のネズミに比べると食べることができるものの幅が広く、生きていくためにあらゆるものをエネルギー源とすることができたから。

ウ ハダカデバネズミは、陸上と地下の両方で暮らしてきた小型のネズミを祖先に持ち、生息地によって個体数を分散させてきたことでヘビなどの天敵におそわれずにすんだから。

エ ハダカデバネズミは、天敵の少ない地下を生活環境とし出産数が少なくても生存できるようになったことで、一匹当たりがもらえる食料の取り分を多くすることができたから。

オ ハダカデバネズミは、低酸素の地下環境を巣穴とし役割分担をしながら生活してきたことで、活動するために必要なエネルギーの消費が少なくストレスもかかりにくい生活ができたから。

問四 — 部② 「ハダカデバネズミのどこを真似したらヒトも同じように超長寿になれるのでしょうか」とありますが、筆者はヒトが「超長寿」になるためにはどうするべきだと考えていますか。それを説明したものととして、最もふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア ヒトは、食料調達の能力が野生の動物よりも劣っている（おと）ので、もっと手に入れることが簡単な食料をエネルギー源とできるようなヒトが食べることのできる食料の幅を広げるべきである。

イ ヒトは、少子高齢化の社会で生活しており労働人口が少ないので、世代間のバランスをとるために労働人口を増やす取り組みとして高齢者（こうれいしゃ）が長く働ける仕組みを確立するべきである。

ウ ヒトは、子育てに対して消極的な姿勢をもっている（おと）ので、子育てがしやすくなるように社会全体のサポートを手厚くすることで産むことに特化したヒトをつくり出すべきである。

エ ヒトは、労働によるストレスをかかえすぎているので、年長者が多く負担をしても社会で働き続けることで、若い世代の労働のストレスを減らす仕組みを確立するべきである。

オ ヒトは、陸上でしか生活することができないほどネズミに比べて適応能力が低いので、まずはどのような環境下でも生活ができるように身体の機能を強化していくべきである。

問五 — 部③ 「社会的な変革」とありますが、どういうことですか。四十字以内で説明しなさい。

問六 — 部④ 「命のたすきを次に委ねて『利他的に死ぬ』」とありますが、どういうことですか。その説明として最もふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 自分の時間と体力を使って社会に貢献（こうげん）するために、社会の仕組みの一部となって生きるということ。

イ 他の誰（だれ）のものでもない自分だけの人生にするために、自由気ままに好きなように生きるということ。

ウ 自分と同じ遺伝子を絶やさないために、子どもを産んでその子の世話をしながら生きるということ。

エ 人間という種を存続させていくために、進化していく上での多様性の一つとして生きるということ。

オ 先祖が築き上げた歴史と伝統を次の世代に残すために、文化の記録を残しながら生きるということ。

問七

X

 に入る言葉として、最もふさわしいものを解答用紙の空欄（くうらん）にあうように本文中からそれぞれ漢字二文字で抜き

出して答えなさい。

問八 — 部⑤ 「自分という存在を失う恐怖」とは、どのようなものですか。五十字以内で説明しなさい。

二 次の文章を読んであとの問いに答えなさい。

カナの父親は、プロレス団体JPFに所属し、マサ横島という名前で活動するプロレスラーである。人気もあまりなく、怪我をかかえたマサ横島は、所属する団体から引退を言い渡された。負けたら引退となる試合の相手にJPFのスター選手である御子柴大河との試合が決定した。そんな中、対戦相手の御子柴から娘のカナを試合に呼ぶように勧められた。

「呼びましようよ、カナちゃん」

「なんでだよ。言ったら、あいつは興味がないんだって、プロレスに」

「でも、カナちゃんも見たらわかりますって。プロレスも、マサさんのスゴさも」

横島は、少しだけ考えるようなそぶりを見せたが、いやいい、と首を横に振った。

「引退試合ですよ、だって」

「娘が見てると思ったら、調子狂うだろうが。それに——」

「それに？」

「やっぱ、娘には見せたくないだろう、負ける姿は」

「 中略 」

父親の試合は、初めてプロレスを見るカナでも、なんとなく退屈だな、と感じた。動きがダイナミックな御子柴に比べると、マサ横島は足が重く、シャープさに欠ける。汗をこぼしながら肩で息をしている様子は、苦しそうで、見ているのが辛い。

もう、四十七だし。

普通の家のお父さんなら、でっぷりと飛び出したお腹を抱えて、口癖のように「疲れた」とぼやく続けてもおかしくない年齢だ。なぜ、人にひっぱたかれたり、投げられたりしなければならぬのだろう。辛い思い、痛い思いをして、バカみたいだと思う。贅沢さえ言わなければ、いくらだって他に仕事はあるはずだ。

本当は、父親の試合を見るに来るつもりはなかった。今日はチケットをもらって、仕方なく来たのだ。チケットを用意してくれたの

は、リング上にいる対戦相手、御子柴大河だった。

つい数日前、卒業間近の学校から自宅に帰ってくると、家の前にやたら派手なスポーツカーが停まっていた。何事かと思いつながら横を通り過ぎようとする、まるでカナの帰りを待ち構えていたかのように、中から男が降りて来た。着ている服がはち切れそうな胸の筋肉に、丸太のような上腕。父親の体つきを見ているカナには、一目でプロレスラーだとわかった。

男は、軽いノリで世間話などをしながら、カナの緊張を和らげると、「JPFの御子柴大河」と名乗った。驚きながらも、知っています、と答えると、御子柴は嬉しそうにはしゃいだ。子供のように無邪気な笑顔が印象的だった。

何用かと尋ねると、御子柴はカナにチケットを差し出した。そこで初めて、カナは父親がレスラーを引退するかもしれない、という事実を知った。驚きはあったが、嫌な気持ちにはしなかった。ようやく危ない仕事を辞めてくれるのか、とほっとしたくらいだ。負けて、引退すればいいと思った。

——マサさん、最後の試合になると思う。

——俺とやるからね。俺は負けないから。

プロレスは、正直観たいとは思わない。小さい頃から、体中にアザやらキズやらを作って帰ってくる父親を見てきたせいで、「怖い」「痛い」というイメージが頭にこびりついている。

だが、手を出そうとしないカナに無理やりチケットを握らせると、御子柴は、「絶対来て」「俺が自腹で買ったんだから」とまくし立て、風のように去って行った。

チケットをもらった手前、気が進まないままなんとなく会場に来てしまったが、やはり来るべきではなかったと後悔した。父親が技を受ける度に、またケガでもしないかと背筋が凍る。

根っからのプロレスファンらしい隣の客が、ずっと不満そうにぶつぶつとぼやいている。「シヨッパイ試合」という表現が、カナには（A）来なかったが、あまりいい意味ではないということによくわかった。

どうなることかはらはらしながら見守っていると、蹴りを食らったマサ横島が、リングの外にまで吹っ飛んできた。ガシャン、と、ものすごい音がして、目の前の鉄柵に大きな体が打ちつけられる。カナが握ってもびくともしない金属の柵が、（B）変形するほどの勢いだ。

(C) 手を伸ばしてしまいそうになったが、^③すんでのところで思いとどまった。今日の前には、自分の父親じゃない。プロレスラー・マサ横島なのだ。父親の姿をしているのに、全く別の存在が目の前にいるようで、カナの頭は混乱した。自分の家族が痛い思いをしている、と考えてしまう心と、これはプロレスなんだ、きつとお芝居なんだ、と考える頭がちぐはぐになって、涙が出そうになった。

痛みにあえぐマサ横島が立ち上がってくると、正面から目が合った。目を血走らせ、獣のような表情を浮かべていたマサ横島が、カナを見つけたほんの一瞬だけ、表情を変えた。パパだ、と思うと、何か言葉をかけてやらなければ、と、勝手に心が動いた。もう、いいよ。痛いでしょ？ 疲れたでしょ？ そんなに頑張らなくてもいいって。やめようよ。

ありとあらゆる言葉が頭に溢れ出していたにもかかわらず、カナの口から出たのは、「頑張つて」という言葉だった。

マサ横島はカナの言葉に應えることはなく、狂ったように喚きながら、カナが座っていたパイプ椅子を無理やり奪い、リングに戻って行った。若いプロレスラーが予備の椅子を手に駆け寄ってきて、ケガはありませんか、と小声で聞いてきた。放心状態のカナは、呆然と立ち尽くしたまま、リング上のマサ横島を見上げるしかできなかった。

「御子柴ー！」

会場中に響き渡るような大声を出すと、リング上に戻ったマサ横島が、持って行ったカナの椅子で、御子柴を殴りつけた。あの固い椅子を振りかぶり、思い切り振り下ろす。その度に、御子柴が苦痛の声をあげてのたうち回った。リングサイドにいと、心臓が縮みあがりそうなほど強烈な音が聞こえてくる。これは本当にお芝居なのだろうか。マサ横島は興奮のあまり正気を失ってしまって、暴走しているだけなのではないだろうか。

やめてよ、もういいよ。

こんなことをするのが、プロレスなの？

会場からは、激しいブーイングが起こっている。マサ横島は反則行為を止めようとするレフェリーを投げ飛ばし、なおも執拗に椅子攻撃を続けている。殴る。叩きつける。突く。挟んで蹴る。ありとあらゆる攻撃を続けているうちに、(D)、椅子が壊れてバラバラになってしまった。あつ、と思ったのも束の間、会場の空気が一気に変わった。

マサ横島へのブーイングは続いている。タイガ！ 立て！ という、相手選手への応援が多い。それでも、^④会場の空気を支配しているのは、マサ横島である気がした。「シヨッパイ」を連呼していた隣の客も、身を乗り出すようにして、リング上の攻防に釘づけになっている。

マサ横島が、観客の心に、火をつけたのだ。

「決めるぞお！」

全身に力を漲らせて、マサ横島が御子柴を抱え上げようとした。マットには、壊れた椅子の残骸が敷かれている。ここに御子柴を叩きつけようというのだ。これは危険だ、という空気が、声援やブーイングに熱を与える。

だが無情にも、椅子の上に叩きつけられたのは、マサ横島だった。

椅子攻撃を受けてふらついていたはずの御子柴が、腕力に物を言わせてマサ横島を逆に抱え上げ、勢いよく頭から落とした。会場から一斉に、ああー！という悲鳴が湧き起こった。

死んでしまうのではないかと思うほどの角度で落とされたはずのマサ横島は、顔を真っ赤にし、咆えながら立ち上がった。どよめき、歓声。足を踏み鳴らす音。

そこからの十五分は、もはや言葉にならなかつた。ショーと言うより、命の削り合いだ。立ち上がったマサ横島を、力でなぎ倒す御子柴。幾度となく倒されながらも、執拗に御子柴の腕を攻めるマサ横島。御子柴の技は一つ一つが力強く、強烈だ。対する横島もぼろぼろになりながらも、御子柴の腕を抱え込むと、鬼のような形相で絞り上げた。その度に腕がありえない方向に曲がり、（E）へし折ってしまうのではないかと恐ろしくなつた。

マサ横島の関節攻撃は、御子柴を相当苦しめているように見えた。序盤は冷やややかだった観客も、あわやというシーンを見せられるうちに興奮し、前のめりになっていく。もしかしたら **b** 大番狂わせがあるかもしれない。マサ横島が勝ち、ベルトを巻くという。

——二十五分経過、二十五分経過。

アナウンサーの声が、声援にかき消される。あつという間に時が過ぎていく。気がつくとき、カナも必死で声を張り上げていた。

異様な空気の中、御子柴大河が、一瞬のスキをついてロープに走った。隣の客が、「ラリアット！」と叫ぶ。リングの真ん中で、ほんの一瞬だけ棒立ちになったマサ横島に、勢いをつけた御子柴の太い腕が迫つた。

どん、というものすごい音がして、マサ横島が、後頭部からマットに叩きつけられた。倒れた勢いで、下半身が跳ね上がるほどの強烈な一撃だ。御子柴が **c** 間髪入れずにリングの四隅に立てられた鉄柱の一つに上り、両手の人差し指で、天を指した。

これは決まった、と、誰かがため息交じりに言うのが聞こえた。御子柴大河は両手を翼のように広げて飛び上がり、全体重を倒れた

マサ横島に浴びせかけた。半ば爆発音のような大きな音が響き渡り、これまでで一番大きな歓声が上がった。カナの周りの客も、総立ちだ。

御子柴がマサ横島の脚を抱え、押さえ込みに入る。いかにプロレスの知識のないカナであっても、これくらいは知っている。3カウントが入ると、マサ横島の負けが決まる。

レフェリーが、大きなアクションでマットに這いつくばり、手でマットを叩く。動きに合わせて、観客が一齐に、ワン、とカウントを取った。

「パパ！頑張って！」

カウントを取る声に押しつぶされそうになりながら、カナは懸命に叫んでいた。

父親は、家にいる日は毎日、朝早く起きて走りに行く。全身に汗を滴らせながら筋トレをしたり、食事を制限して体重を落とした。腰のケガに苦しむ姿も見えてきた。未だに、夜は痛みになさされていることもある。

学校の先生は、努力は報われるから努力しなさいと言う。でも、カナは嘘だと思った。努力や苦勞が間違はなく報われるのなら、マサ横島は今頃大成して、豪邸に住むお金持ちになっているに違いない。

御子柴を見ると、父親がどうしていつまでも人気者になれないのかがよくわかる。持って生まれた容姿、体格、そして人間の持つ空気。どれをとっても、御子柴は恵まれていて、父親は何一つ持っていない。人間というのは、不平等だ。同じだけ努力しても報われない人間もいる。カナがプロレスを好きになれない理由は、もしかしたら、父親がいくら頑張っても受け入れてもらえなかったからなのかもしれない。

だからこそ、マサ横島には、簡単に負けてほしくなかった。報われて欲しかった。二十五年の努力の証として、ベルトを巻いて欲しかった。負けるな、頑張れ。カナは、声の限りに叫んで、3カウントを取ろうとする会場に、^⑤独り、戦いを挑んでいた。

(行成 薫 『立ち上がれ、何度でも』による)

【語注】

(注1) ブーイング … 観客が不満の意を表して声をあげること。

(注2) レフェリー … リング上で試合を裁く審判のこと。

(注3) ラリアット … プロレスにおける技の一つ。腕を相手の上半身にぶつける。

問一 ――部 a ～ c の語句の本文中の意味として最もふさわしいものを次の中からそれぞれ一つずつ選び、記号で答えなさい。

a 「根っからの」

ア 熱^わ狂的な イ 昔からの ウ 元気のいい エ 研究熱心な オ 素行の悪い

b 「大番狂わせ」

ア 大きな失敗 イ 大幅^{おおはば}な時間延長 ウ 予想外の出来事 エ 期待外れの結果 オ 混乱させる行動

c 「間髪入れず」

ア 静かに イ とつさに ウ 油断せずに エ いたも簡単に オ 相手を待たずに

問二 (A) ～ (E) に入る語としてふさわしいものを、次の中からそれぞれ一つずつ選び、記号で答えなさい。ただし、同じ記号を二度以上用いてはいけません。

ア 本当に イ ついに ウ とつさに エ ピンと オ ぐにやりと

問三 ――部①「嫌な気持ちではしなかった」とありますが、なぜですか。その説明として最もふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 感じが良い男性から思いがけず、父親の引退試合のチケットをもらうことが出来たから。

イ 父親が試合に勝つことが出来ず、つらい思いをしていることを心苦しく思っていたから。

ウ 父親の年齢や体の状態を考えると、プロレスを続けていくことは難しいと思っていたから。

エ どうせ負けて引退するなら、スター選手である御子柴に負けるのは悪いことではないから。

オ 急に父親がプロレスをやめてしまうと聞いて、驚きで頭がいっぱいになってしまったから。

問四 ――部②「手を出そうとしないカナに無理やりチケットを握らせる」とありますが、「御子柴」がこのようにした理由の説明として最もふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 父親との試合で自分が勝つところをカナに見てもらい、自分に好意を持って欲しかったから。

イ 良い試合を見ることでプロレスの良さに気づいてもらい、ファンになっても良かったから。

ウ 世話になってるカナの父親にチケットを渡すように頼^{たの}まれたので、なんとか渡したかったから。

エ 自分でお金を出した上にわざわざ持ってきたのだから、なんとも来てもらおうと思ったから。

オ 父親がプロレスをする姿を見て、カナの知らない父親のすごさを知って欲しいと思っていたから。

問五 ——部③「すんでのところで思いとどまった」とありますが、なぜですか。その説明として最もふさわしいものを次の中から

一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 父親を応援したい気持ちはあったけれど、プロレスはやめて欲しいので手を貸すわけにはいかないし冷静に判断したから。
- イ 父親が負けてしまうかもしれないと思ったが、他の観客の様子を見てもしかしたら勝てるかもしれないと思い直したから。
- ウ あまり人気のないマサ横島に手を貸すと、自分が娘であることを他の観客に気づかれてしまうのではないかと考えたから。
- エ 苦しむ父親に何かをしてあげたかったが、プロレスラーとして必死に闘う父親の邪魔をすることは出来ないと思っただから。
- オ 相手に勝って欲しいという一心で父親を助けようとしたが、観客の自分が手を貸すと反則になってしまうと気が付いたから。

問六 ——部④「会場の空気を支配しているのは、マサ横島である気がした」とはどういうことですか。その説明として最もふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 父親のなりふり構わない戦いぶり、会場の観客たちを夢中にしたのだとカナには感じられたということ。
- イ カナは父親がしたくもない反則行為をあえてすることで、試合を優位に進めていると理解したということ。
- ウ 圧倒的に相手が優勢ではあるが、娘のカナにとっては父親の方が勝利に近いように感じられたということ。
- エ 相手への声援が多いものの、カナは大多数の観客が内心では父親を応援しているような気がしたということ。
- オ 反則行為をしているが、レフェリーのいない状況では父親が勝つに違いないとカナは確信したということ。

問七 ——部⑤「3カウントを取ろうとする会場に、独り、戦いを挑んでいた」とはどういうことですか。八十字以内で説明しなさい。

あとの各問いに答えなさい。

(i)

- A ねえねえ、「なぞかけ」っていう言葉遊びを知ってる。
 B ううん、名前くらいは聞いたことあるけどよく知らないな。どんな遊びなの。
 A お題としてつながりのなさそうな二つの言葉をあげて、その二つの言葉に共通する内容を答える言葉遊びなんだ。
 B ふーん、例えばどんなのがあるの。
 A 「日本の自然」とかけて「オーケストラ」と、ときます。そのところは。「しき(四季・指揮)」があるでしょう。
 B なるほど。上手いこと言うね。他にはないの。
 A じゃあ「秋」とかけて「薬」と解きます。そのところは。どちらも「こうよう」があるでしょう。
 B うんうん。わかってきた。じゃ次は僕が答えるね。
 A じゃあ「おでん」とかけて「本」と、ときます。そのところは。
 B どちらも I と困るでしょう。
 A 正解。飲みこみが早いね。じゃあ次ね。「いちご」とかけて II と、ときます。そのところは。
 B どちらも甘い方がよいでしょう。
 A すごい。僕より上手なんじゃない。

問一 本文の内容を理解した上で——部「こうよう」を二通りの漢字で記しなさい。

問二 本文の内容を理解した上で I ・ II に当てはまる適語を考えて書きなさい。

問三 次の語群から言葉を二つ選び、その二つの言葉に共通する特徴を自分で考えて答えなさい。

【語群】 歌・読書・時計・日本語・猫・マラソン・水・惑星

- (ii) 次の文章は九つの段落で構成されています。段落AとBの間には三つ、段落BとCの間には三つの段落が入ります。あとのア～カの段落を正しく並べかえ、文章を完成させなさい。(A B C)

A 自分の思うことをハッキリ言わないと相手に伝わらない。遠慮して相手が察してくれるのを期待するのは甘えている。海外の人はハッキリと言葉で自己主張するし、感情表現も豊かだ。日本人も思うことはハッキリ言葉にし、要求があれば相手にわかるように主張することが必要だ。そうしなければ相手に伝わらない。自分の気持ちを隠したりせずに率直に表現すべきだ。そうでないと相手にはわからない。たしかにそうかもしれない。

B ハッキリ自己主張することでお互いにわかり合える。それは幻想にすぎない。

C ところが、その伝統が崩れ、自己主張が自由に飛び交うようになってきた。

(榎本博明『ディベートが苦手、だから日本人はすごい』による)

A このところ自己主張が推奨されるようになり、自己主張を促す教育が広まることで、はたして日本の社会にどのような変化が出てきたか。人と人の相互理解が深まったと言えるだろうか。決してそんなことはないだろう。

I 自己主張する人間を人格形成の理想とするアメリカ社会が訴訟社会になっていることが、まさにそのことを証明している。お互いに強烈に自己主張をしていくと、法的に決着をつけなければならぬほど、あらゆることから紛糾してしまうのだ。

U むしろ、自分勝手な自己主張がぶつかり合うばかりで、殺伐としてきた観がある。他人の気持ちや立場を配慮して自己主張を抑えるということがなくなれば、お互いの主張がぶつかり合うようになるのは当然のことだ。

E 日本のコミュニケーションは、そのような自己主張のぶつかり合いによる紛糾を防ぐ機能を果たしてきた。自己主張にこだわることを見苦しく感じ、それによる対立を虚しく思う日本人の感受性が、あえて自己主張を抑制するコミュニケーションを発達させてきたのである。

O しかし、遠慮や察し合い、譲り合い、相手を立てる、相手を思いやる、言い訳をしない、感情を抑制するといった日本的コミュニ

ニケーションの奥ゆかしさも忘れてはならない。

カ 自分の思いや要求をストレートに話したところで、相手に理解してもらえとはかぎらない。感受性や価値観、立場が異なれば、ものごとを見る構図が違ってくるため、いくらハッキリ伝えたところで、わかり合えるわけではない。むしろ、お互いの自己主張がぶつかり合って、激しい争いになりがちだ。

国語解答用紙

受験番号	氏名

※の欄には何も書かないこと。

一									
問八		問六		問五		問三		問一	
								A	a
		問七				問四			
								B	b
		と							
								C	c
								D	c
								E	d
								e	
								※	
50		40		20		40		20	

二									
問七				問三		問二		問一	
						A		a	
				問四					
						B		b	
				問五				C	
				問六		D		E	
								※	
80				60		40		20	

三									
(ii)		(i)							
A		問三		問二		問一		問一	
		共通点		I					
		I							
B		I							
		II							
C									
								※	

※
